LEVEL 5

Web Tadoku Books

美知子（みちこ）の星空

原作　大塚（おおつか）えみ

翻案（ほんあん）　川本かず子

朗読音声のダウンロード
Audio download

★読む前に　Before you read

《多読の読み方》

多読とは、とてもやさしい本から楽しくたくさん読んで日本語を身につけていく方法です。

次の4つのルールを守って楽しく読みましょう。

1. やさしいレベルから読む
2. 辞書を引かないで読む
3. わからないところは、とばして読む
4. 進まなくなったら、他の本を読む

《How to do Tadoku》

Tadoku recommends that everyone should start with very easy books and enjoy a lot of them following the 'Four Golden Rules' below.

1. **Start from scratch.**
2. **Don't use a dictionary.**
3. **Skip over difficult words, phrases and passages.**
4. **When the going gets tough, quit the book and pick up another.**

今年も、もうすぐクリスマス。駅前の通りは、イルミネーションがキラキラと輝いている。歩いている人たちの顔も楽しそうだ。美知子は高校のクラス会に向かっていた。

――もうすぐクリスマスか・・・。みんな楽しそう。私は、今年もまた、一人で過ごすんだろうなあ――

にぎやかで明るい町を歩きながら、美知子は、そんなことを思った。

美知子二十五歳。今の会社に就職して三年。毎日、八時に家を出て満員電車で会社に行く。毎日、同じような仕事をして、また満員電車で家に帰る。高校、大学時代は好きな人もいたし、まあまあ楽しかった。でも、就職してからの美知子は、自分の選んだ仕事に満足していなかったし、恋人もいない。そんな時、友だちに誘われて、卒業してから初めて高校三年の時のクラス会に行くことにした。

ーー大学進学や就職のために、一緒に頑張った仲間たちに会える。うれしいけれど、みんな、すごく変わってたら、どうしようーー

店は、思ったより駅から近かった。美知子は、ちょっぴり不安を感じながらドアを開けた。

店内には、懐かしい顔がいっぱいだ。コートを脱いで席に着こうとした時、声がした。

「お！　美知子、久しぶり！」

「あ、広志」

「美知子、ここ座れよ」

「あ、うん、いいよ」
広志は美知子の隣に座った。
――広志、私の名前、覚えていてくれたんだ――
美知子は、高校の時、広志のことが好きだった。広志はサッカー部のキャプテンでかっこよく、人気者だった。広志の周りには、いつもかわいい女の子が集まっていた。美知子は美術部だった。美術室で絵を描きながら、校庭でボールを追いかけ走り回る広志を見ているだけでドキドキした。
「美知子、きれいになったなあ」
「え？　本当？」
「うん、きれいになったよ」
「ありがとう」
広志にじっと見つめられ、美知子は恥ずかしくなって下を向いた。
――美知子、かわいいじゃん、こんなかわいかったかなあ――
広志がそう思った時、サッカー部だった一郎が声をかけてきた。

「やあ、広志」
すると、人気者の広志の周りに、次々に友だちが集まってきた。
「よ、広志」
「広志、久しぶり」
「広志、こっち来いよ」
広志を真ん中に、にぎやかで大きなグループができた。
美知子は、広志がいなくなった席に一人で座っていた。
そこに、美術部で仲の良かった友だちが何人か来て声をかけた。
「美知子、久しぶり」
「美知子、元気だった？」

美知子の周りにも、小さなグループができた。

クラス会が終わって、美知子が店を出ると、

「美知子」

と、先に店を出ていた広志が呼んだ。

「携帯の番号、教えろよー」

「え？」

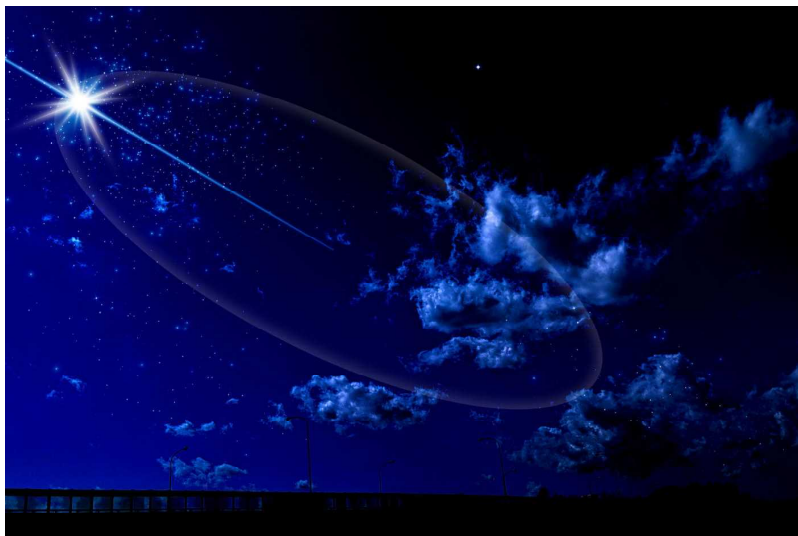
「だめ？」

「ううん、いいよ、もちろん」

広志のマフラーが風で揺れた。雪が降ってきそうな寒い夜だった。

広志、二十五歳。大学でもサッカー部だった。大学卒業後、サッカーの経験を活かしてスポーツ関係の会社で働いている。おしゃれでかっこよく、雑誌の読者モデルになったこともある。給料はほとんど服や飲食に使っている。

次の日、会社から駅へ歩きながら、美知子は、クラス会で広志に声をかけられたことを思

い出していた。その時、携帯電話が鳴った。広志からだった。美知子はドキドキして電話に出た。
「もしもし」
「あ、美知子？」
「うん」
「広志だけど」
「こんばんは」
「あのさ、今週、会いたいんだけど、空いてる日ある？」
「え？　ちょっと待ってね」
美知子は、カバンから手帳を出した。
「えーと、木曜が空いてる」
「お！　俺も空いてる。飲みに行こうぜ」
「え、うん、いいよ」
「ええと、新宿でいい？」

「うん、いいよ」

「じゃあ、七時に新宿南口で」

「うん、わかった。七時に新宿南口ね」

「うん、じゃあな」

「うん」

　電話を切った後、美知子は、空を見上げた。

夜空に一つ、とても明るく光る大きな星があった。

美知子は、その大きな星にお願いをした。

――今年こそ、いいことがありますように――

そして、胸いっぱいに息を吸った。

木曜日の夜、美知子は、会社を出る前に、いつもより時間をかけてお化粧を直した。

――あの人気者の広志と二人で会う？　高校時代には考えられなかったことだ――

二人は新宿で会った。

広志は、スーツ姿だった。

――スーツの広志も、かっこいいなあ――

広志おすすめの蕎麦屋で食事をした後、夜景の見えるバーに行った。

満月が明るく輝いていた。

二杯目のカクテルを、美知子が飲み終えると、広志が言った。

「美知子、俺と付き合わない？」

「え？」

美知子は、驚いて言葉が出なかった。美知子は、広志の目をじっと見つめた。

「俺と付き合うと、毎日、面白いよ」

広志が笑顔で言った。美知子は笑ってしまった。

「じゃあ、よろしくお願いします」

クリスマスは、横浜のおしゃれなレストランを広志が予約してくれた。

美知子の席から、横浜ベイブリッジが見えた。夜の海に船が浮かんでいる。船の明かりが海に映って揺れている。

「素敵な景色だろ？」

「うん、とてもきれい」

「料理もおいしいだろ？　料理長は、俺の友だちなんだよ」

「うん、とてもおいしい。料理長が友だち？」

「そう」

料理長が二人の方を見て手を振っていた。美知子も手を振って、

「お料理、とっても、おいしいです」

と言った。

　コーヒーを飲み終わると、広志がどこかへ行った。美知子は、広志を待っている間、夜景を眺めていた。

ーー今年のクリスマスは、広志と二人なんて、信じられないーー

その時、広志の声がした。

「美知子、メリークリスマス！」

戻ってきた広志は、赤いバラの大きな花束を持っていた。

「わあ！　きれい！」

花束は大きくて広志の顔が見えなかった。

「広志、ありがとう！」

ーーなんて素敵なクリスマスなんだろう！ーー

美知子は幸せだった。

広志と付き合って美知子は変わった。
金曜日の夜は、広志と渋谷や六本木のクラブへ行って、お酒を飲んで踊った。
「美知子、そのミニスカート可愛いよ」
「ほんと？ 短すぎない？」
「うん、おれは好きだな」
「ありがとう」
「お？ 髪型も変えた？ いいね」
「わかる？」
「もちろん、わかるよ、色も変えただろ？」
「うん、ちょっとだけね」
「美知子、どんどん可愛くなってるよ」
美知子の髪は、明るい茶色になっていた。美知子は、広志と付き合う前は、ミニスカートを買ったことも、髪を茶色にしたこともなかった。クラブに行って、踊ったこともなかった。
美知子は、店の鏡の中の広志と自分の姿に満足した。

二　迷い

広志と付き合って、半年が過ぎた。
その日、美知子と広志は、イタリアンレストランで夕食を食べていた。
コーヒーを飲んでいると、広志の携帯電話が鳴った。
「もしもし？　どうした？　明日の夜？　大丈夫だよ。わかった。七時に駅前で。じゃあ」
「今の電話、誰から？」
「幸だよ」
「幸って誰？」
「前の彼女」
「え？」
「言ってなかったっけ？」
「知らない」

「何か相談があるみたいで」
「それで、明日会うの？」
「うん」
「幸さんとは別れたんでしょ？」
「別れても友だちだからさ」
「友だち・・・」
「美知子も友だちが相談あるって言ったら、会うだろう？」
「そうだけど・・・」

その夜、美知子は、広志と幸のことが気になって、なかなか眠れなかった。
次の日から、広志は仕事で大阪へ行ってしまった。
美知子は、それから毎晩、一人でクラブへ行き、お酒を飲んで踊った。家に帰って、美知子は鏡を見た。鏡の中には、疲れた顔の美知子がいた。
ーーこれが私？ううん、私じゃない。こんな生活、楽しくないよーー

広志が帰ってきたのは一週間後だ。
「幸さんは、何の相談だったの？」
「仕事が忙しくて疲れてたから、俺と飲みに行きたかったんだって」
「広志じゃなくてもいいのに」
「俺じゃなきゃ、だめなんだよ」
「別れたのに、仲がいいね」
美知子には、俺と幸の関係がわからないだろうなあ」
「うん、わからない」
「俺も疲れた時、幸といると元気になるんだよね」
「・・・」
「でもな、幸は忙しくても、疲れてても、楽しそうなんだよなあ」
次の日、美知子は広志の言った言葉を思い出した。
――『幸は、忙しくても、楽しそうなんだよなあ』――

幸は、ファッションの学校を卒業して、有名なファッションブランドで働いている。

美知子は、そんな幸と自分を比べた。

ーー幸さんは、仕事を楽しんでいる。私は仕事を楽しんでいるだろうか？　私が心からやりたい仕事は何だろう？ーー

それから、美知子は、毎日、自分のやりたいことは何か、考えるようになった。

子どもの頃、美知子は、夏休みになると、おばあちゃんの家へ遊びに行った。おばあちゃんは、畑で野菜を作っていた。トマト、キュウリ、ナス。畑の野菜はみんな、とてもおいしかった。こんなにおいしい野菜を作れるおばあちゃんはすごいなと思った。それから、美知子は、自分で野菜を作ることに興味を持った。美知子は

今、家の小さなベランダで、トマトとナスを育てている。
でも、もっと大きな畑で、野菜をたくさん作ってみたかった。
土や風、太陽、そんな中で働いたら楽しいだろうなと思い始めた。それに大好きだった
絵もずっと描いていないことに気づいた。
——私がやりたいことは、何だろう？　野菜を作ること？　自然の中で働くこと？——

美知子は広志に、これからのことを話してみることにした。
「広志、私の話聞いてくれる？」
「いいよ。何？」
「あのね、自然の中で働くってどう思う？」
「え？　自然の中で？」
「うん」
「何をしたいの？」
「畑で野菜を作りたいの」

「え？ そんなの疲れるだけだよ」
「今の仕事だって疲れるよ」
「今の会社に慣れてきたんだろ？」
「うん、慣れてはきたけど・・・」
「じゃ、続ければいいじゃない」
「でも、今の仕事、楽しくないから」
「野菜作るのは楽しいの？」
「うん、きっと楽しいと思う」
「そうかあ？ 俺はそうは思わないけど」
――広志は、わかってくれなかった。でも、私は、やっぱり自然の中で働いてみたい
――
それからも、美知子は、広志と遊んでいても、会社にいても、いつも自分のやりたいこと

を考えていた。自然の中で働きたいという思いがどんどん強くなっていった。

美知子と広志が付き合って、もうすぐ一年が経つ。美知子は、外出することも楽しいけれど、たまには、家でゆっくり料理を作って、休日を過ごしたかった。

「明日の夜、広志の家へごはんを作りに行ってもいい？」

「明日は土曜日だし、家で食べる気分じゃないな」

「そう」

「俺、表参道に新しくできたピザ屋に行ってみたいんだよ」

「ピザ屋？」

「チーズにハチミツがかかったピザがおいしいんだってさ。行ってみようぜ」

「・・・わかった」

広志は、いつも自分の思った通りに決めてしまう。

次の日の昼頃、広志から電話がかかってきた。

「美知子、ごめん。今日、会えなくなった」

「え？　どうしたの？」
「入院している友だちのお見舞いに行くことになったんだ」
「突然だね」
「今日しか行ける日がなくて」
「・・・わかった。じゃあ、また今度」
「ごめんな」
――いつも、私が広志に合わせてばっかり。服も髪型も広志の好みに合わせてる…。
私、何か無理しているんじゃないかな？――

　外は晴れている。美知子は、原宿へ買い物に行くことにした。休日の原宿は、若者たちがたくさん集まり、にぎわっていた。
美知子は、自然に関わる仕事を探し始めていた。本屋に入り、雑誌を読んでいると、西表島のさとうきび刈りのアルバイト募集を見つけた。
――わあ、きれいな所！　西表島だって。へえ、さとうきび畑だ。さとうきび刈り、

やってみたいなーー
美知子は、雑誌を買って本屋を出た。
　日が暮れて、お腹が空いてきた。表参道まで来ていたので、美知子は広志の行きたがっていたピザ屋へ行ってみることにした。
そのピザ屋は人気があり、寒いのに、外で待っている人もいた。
ーーやっぱり、また今度、広志と一緒に来ようーー
そう思って帰ろうとしたら、窓際の席に広志がいるのが見えた。
ーーあれ？　広志？　病院へお見舞いに行っているはずなのに、なんで？　あれ？　女の人と一緒にいる。あの人、幸さんだ！ーー、

美知子は、広志の家で、幸の写真を見たことがあったので、覚えている。

美知子は、店から離れて、広志に電話をかけた。広志は、店の外へ出てきて、電話に出た。

「もしもし？美知子、何？」

「広志、今、どこにいるの？」

「病院だよ」

「友だちと一緒？」

「一人だよ。病院だから、長く話せないんだ。また明日、俺から連絡するよ」

広志は、そう言って電話を切ると、幸のいるテーブルに戻り、楽しそうに話し始めた。広志は、美知子に嘘をついていたのだ。

次の日、家でコーヒーを飲みながら、雑誌を読もうとした時、広志から電話がかかってきた。

「昨日はごめんな。これから会える？」

「会えない。表参道のピザはおいしかった？」

「え？」
「昨日、ピザ屋に二人でいるのを見たよ」
「誰と？」
「幸さんと」
「俺に似てる人だったんじゃないか？」
「広志だったよ」
「・・・」
「今までも、私に黙って幸さんと会ってたの？」
「まあ、友だちだから」
「友だちだから何？」
「会ってたよ」
「幸さんのこと、まだ好きなの？」
「自分でもわからない」
「え？」

「美知子のことも好きだけど、幸のことも気になる」
「え？何、それ」
「俺は二人とも好きなんだよ」
「・・・広志、私たち、もう、別れよう」
「・・・」
美知子は電話を切った。
美知子は、窓際から見た二人の姿を思い出した。
――広志も幸さんもおしゃれで、テレビドラマの中の二人みたいだった。私は、幸さんみたいにはなれない・・やっぱり、広志とは別れよう――
美知子は、コーヒーを飲み干すと、テーブルに置いてある雑誌を手に取った。そして、さとうきび刈りのアルバイト募集のページを開いた。
――私は、私のやりたいことをしよう――
美知子は、西表島へ行くことを決めた。

三　再出発

美知子は、一月末で会社を辞めて、二月初め、西表島へ出発した。

西表島は、沖縄本島の南西にある緑豊かな島だ。沖縄本島から飛行機で石垣島に行き、石垣島から高速フェリーに乗って四十分くらいで着く。

美知子が西表島の港に着いたのは、お昼過ぎだった。美知子は、高速船から降りた。太陽がまぶしい。二月だけれど、汗が出てくるほどの暑さだ。歩いていると、海の匂いを乗せた風が、気持ち良く吹いてきた。

どこまでも広がる海と大きな空、緑の豊かな山を見て、美知子は大きく息をした。体も心も元気いっぱいだ。

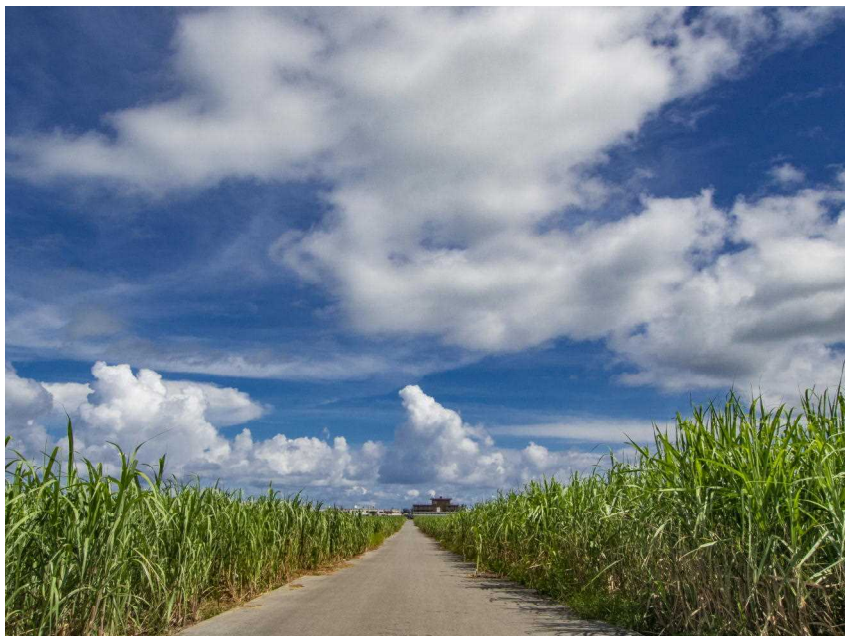
――気持ちいいなあ――

初めてなのに、美知子は、まるで自分の故郷に帰って来たような懐かしさを感じた。

　次の日から、さとうきび刈りの仕事が始まった。

　一緒に働く仲間は十人。近くの家に住んでいる一人以外、みな同じ宿に泊まっている。朝早く、トラックの荷台に乗り、さとうきび畑へ向かった。前方に、サラサラと風に吹かれているさとうきび畑が見えてきた。風が強く吹き、雲は、右から左へ、どんどん流れていった。天気が良く、海を見ると、隣の島が青くぼんやり見えた。

　さとうきび畑が近づいてきて、美知子は、わくわくした。さとうきび畑に着くと、走って畑の中に入った。さとうきびは、背が高い。美知子が手を伸ばしても届かない。

――わあ、大きい！　へえ、これが砂糖になるんだ――

いよいよ、作業が始まった。力があって慣れている人が、畑のさとうきびを刈り取り、その刈り取ったさとうきびの葉っぱを、他の仲間たちが切り落としていく。

美知子は、自然の中で働いていることがうれしかった。汗をかくことが気持ち良かった。仕事が終わると、体はくたくたに疲れた。トラックの荷台に乗って帰る時、夕焼けが仲間たちの顔を照らしていた。汗をかいたみんなの笑顔が輝いて見える。その中に、笑顔がとてもすてきな青年がいた。それが、壮介だった。

壮介、二十二歳。十人の仲間の中で、近くの家に住んでいる一人というのが壮介だ。一年前から一人で西表島に住んでいる。子どもの時から、自然の中で遊ぶのが好きだった。父親と釣りに行ったり、家族でキャンプをしたりした。高校一年の時、自転車一人旅で、西表島に来た時、この島が大好きになった。ここにまた来たいと思った。その後、毎年、夏休みも春休みも、西表島で過ごした。夏はパイナップル、春はさとうきび刈りのアルバイトをするようになった。島の歌や踊りも気に入り、家の近くのおじいさんに教えてもらっている。

壮介は、仲間の中で一番さとうきび刈りが早くて上手だ。
どんどん、さとうきびを刈っていく。

――壮介って、すごい！――
美知子が壮介を見ていると、壮介が顔を上げた。壮介と美知子の目が合った。
壮介も美知子も笑顔になった。壮介の笑顔は、かわいくて少年のようだった。
美知子が西表島で働き始めて、一週間が経った。

「痛(いた)い！」
畑(はたけ)で作業(さぎょう)中、仲間(なかま)の一人がケガをした。手から血(ち)が出ている。
すると、壮介(そうすけ)が走ってきた。壮介(そうすけ)は、持(も)っていたタオルで、ケガ人の手を押(お)さえた。そして、トラックに乗(の)せ、病院(びょういん)に向(む)かった。しばらくして、戻(もど)ってきた壮介(そうすけ)は、
「大丈夫(だいじょうぶ)。心配(しんぱい)ない」
と言って、すぐ作業(さぎょう)を始(はじ)めた。

壮介(そうすけ)は、休みの日や、仕事(しごと)の後、一人でよく海や山、川に行く。西表島(いりおもてじま)は、自然(しぜん)が豊(ゆた)かなので、壮介(そうすけ)は楽しくてしかたがないのだ。美知子(みちこ)は、自然(しぜん)は好(す)きだけれど、一人で行く勇気(ゆうき)はない。
ある日、さとうきび刈(が)りが終(お)わった後、美知子(みちこ)は壮介(そうすけ)に話しかけた。
「今日もどこか行くの？」
「海だよ」

「私も一緒に行っていい？」

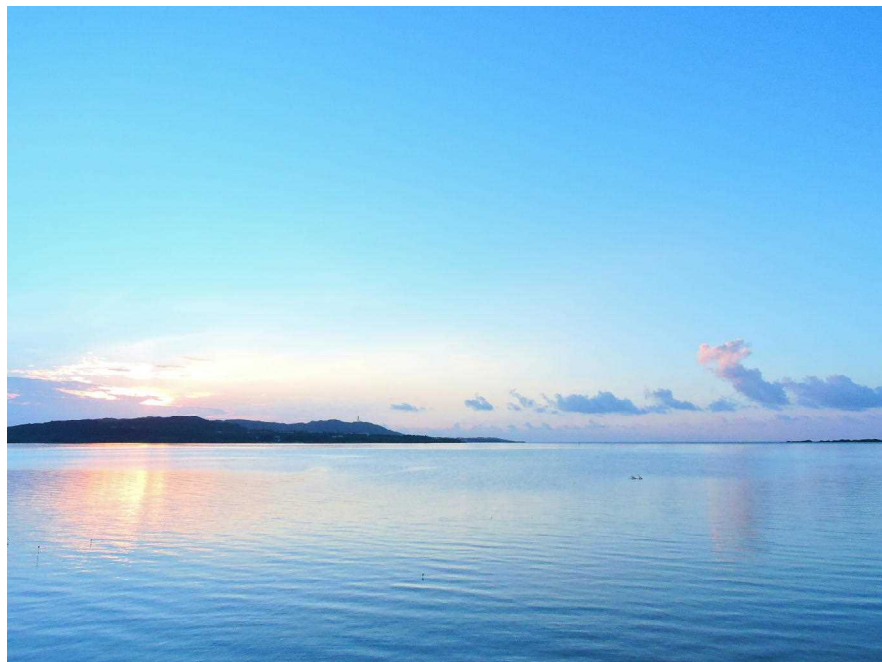
「え、いいよ」

　壮介は、ドキドキした。壮介は、さとうきび畑で美知子と目が合ったときから、美知子が好きになっていた。壮介は、うれしさを隠して、どんどん歩いていく。美知子が壮介の後を歩いていくと、目の前に、海が広がった。オレンジ色の太陽が輝いている。

「きれい！　海がキラキラ光ってる！」

「うん、ほんとにきれいなんだ。それにさ、波の音を聴いていると落ち着くんだ」

「いつも一人で来てるの？」

「うん」

「毎日、この海を見られたらいいなあ」
「うん、俺（おれ）もそう思って、西表島（いりおもてじま）に住（す）み始（はじ）めたんだよ」
「そうだったんだ。私（わたし）、この海を見ながら、野菜（やさい）を作りたいなあ」
「西表島（いりおもてじま）に住（す）んじゃえば？」
「え？」
「あ、あのね、ほんとに、西表島（いりおもてじま）はいいところだから」
「うん、ずっといたいなあ」
「うん、で、畑（はたけ）で野菜（やさい）を作る！」
「それ、私（わたし）の夢（ゆめ）！」
――本当に美知子（みちこ）が西表島（いりおもてじま）にずっといてくれたら、楽しいだろうなあ――
壮介（そうすけ）は、そんなことを思った自分に驚（おどろ）いた。美知子（みちこ）は、壮介（そうすけ）の言葉（ことば）に勇気（ゆうき）づけられた。
　夕日は沈（しず）み、辺（あた）りは暗（くら）くなり始（はじ）めていた。
「そろそろ帰ろう」

「うん、壮介、ここに来る時は、また誘ってね」
「うん、そうするよ」
帰る二人は、幸せそうだった。

それから、二人は一緒に出かけることが多くなった。
仲間たちは、言い合った。
「壮介、変わったよね、女の子と二人で出かけるなんて」
「壮介と美知子、うまくいくといいねえ」
壮介は、好きな女の子には、なかなか気持ちを伝えることができないで、今まで何回か失敗している。壮介は、そんな自分を、そろそろ変えたかった。次に好きになった人には、ちゃんと好きだと言おうと、心に決めていた。

美知子は、西表島に来てから、好きな絵をまた描くようになった。キラキラ光る海、魚が飛び跳ねる川、木々が生い茂る緑豊かな山、描きたい風景がたくさんある。

その日、さとうきび刈りの仕事は、休みだった。

美知子は、壮介に会いに行った。壮介は、庭で、三線を弾きながら歌っていた。美知子を見つけて、壮介は歌うのをやめた。

「ごめん、歌ってたのに」

「ううん、いいよ」

「壮介、今日は、何かある？」

「ないよ。どうして？」

「私、滝に行ってみたいの」

「一緒に行こうか？」

「いいの？」

「もちろん、いいよ」

壮介の運転する車に美知子は乗った。車の窓を開けていると、風が入ってきて気持ち良かった。

壮介は、釣り竿を持って来ていた。美知子はスケッチブックを抱えている。滝に着くと、壮介は、釣り竿にエサを付けた。

「壮介、見て！　あの石の下に魚がいるよ」

「お、ほんとだ」

壮介は釣り糸を川に投げ入れた。すると、五分も経たないうちに、大きな魚が釣れた。

「壮介、すごいね！」

釣りあげられた魚が、岩の上で、元気に飛び跳ねた。

壮介は、魚をつかみ、網に入れた。

一時間の間に、三匹釣れた。

壮介が魚を釣っている間、美知子はスケッチした。

壮介は、川の水で顔を洗った。美知子も真似をした。川の水は、冷たくて気持ち良かった。

壮介は、川原でお湯を沸かし始めた。コーヒーをいれるためだ。
壮介は、コーヒーの入ったカップを美知子に渡した。
「ありがとう」
美知子は熱いコーヒーを一口飲んだ。
「おいしい！」
川が、太陽の光を受けて、キラキラと光っていた。

それから、二人は壮介の家に行って、釣った魚を料理した。壮介は塩焼き、美知子はスープと煮物を作った。
「このスープと煮物、うまい！」
「そう？良かった。うれしい！」
「俺、魚は、いつも刺身か焼くだけだったよ」
「でも、私、ほんとは焼き魚が一番好き」
ビールと泡盛を飲みながら、二人はゆっくりと食事を楽しんだ。

壮介は、食べ終わると、また三線を手に取って静かに歌い始めた。島に伝わる恋の歌だ。

――美知子、俺の気持ちわかってくれるかなあ――

美知子は、その歌を聴いて胸がキュンとして、泣きそうになった。

――私、壮介が好きになっちゃったみたい――

美知子は、もっとここにいたいと思ったけど、立ち上がって言った。

「壮介、今日は、ありがとう」

「こちらこそ」

「もう、帰らなくちゃ」

壮介は、美知子を宿まで送っていった。

宿まで歩く二人を、夜風がやさしく吹きぬけていった。

四　流れ星

それから一週間経った。
その日は、数年に一度、流れ星がたくさん見られる夜だった。
――流れ星を見ながらだったら、きっと好きだって言える――
壮介は、思い切って美知子を誘った。
「ねえ、美知子、流れ星を見に行かない？」
「流れ星！　行く行く！」
初めての壮介からの誘いだった。美知子は、踊り出しそうなぐらい、うれしかった。
壮介と美知子は、車で展望台のある山へ向かった。
車を降り、寝袋を持って展望台まで歩いた。
寝袋に寝転がって夜空を眺めていると、ふいに星がたくさん流れ出した。
夜空に輝く星が、光る線を作っては消えていく。
「うわあ、星がどんどん降ってくる」
「すごいな」

「夢の中にいるみたいだね」
それから、二人は、しばらく無言で夜空を眺めていた。
――壮介のいるこの島にずっといられますように――
――美知子がずっとこの島にいますように――
空を見上げる壮介の横顔を見て、美知子は、涙が流れた。
――やっぱり、私、壮介に恋してる――
寝転がっている二人の手が触れそうになった時、壮介が口を開いた。
「・・・あのう、美知子、聞いていい？」
「え？　うん、いいよ」
「ええとね、美知子は、付き合ってる人いるの？」

「え？ ううん、いないよ」
「ほんと？ でも、好きな人は？」
「え、好きな人？ ええと、それは・・・」
美知子がそう言った時、美知子の携帯電話が鳴った。さとうきび刈りの仲間からだった。
「ごめんね。電話、出るね」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「もしもし、美知子だけど」
「美知子、友だちが来てるよ」
「え？ 友だち？」
「男の人だよ」
「男の人？ 誰だろう・・」
「名前、教えてくれないんだよ」
「わかった。あと二十分くらいで戻るから」

「うん、じゃ、そう伝えるね」

「うん、ありがとう」

美知子は電話を切った。

――誰だろう？　男の人？　友だち？　この島に？　・・・あ！　広志？　まさか！――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「壮介、ごめんね」

「どうしたの？」

「誰か、私に会いに来てるんだって」

「友だち？」

「名前、言ってくれないんだって。だからわからないけど」

「そうか。じゃあ、宿まで送るよ」

「ありがとう。・・・私、もう少しここにいたかったな」

「また、一緒に来よう」

「うん」

壮介も美知子も、言い残した言葉があった。

二人は、もう一度、夜空を見上げた。

急いで戻ると、宿の前に、タクシーが一台停まっていた。

美知子は、車を降りて、走り去る壮介の車に大きく手を振った。

美知子が玄関のドアを開けると、そこには広志がいた。ソファに足を投げ出して座っている。

「広志・・・なんで？」

「迎えに来たんだよ」

「迎えに？」

「もう、東京に帰りたいだろう？」

「私、東京には帰らないよ」

「俺、美知子がいなくて寂しいんだ」

「私は、広志がいなくても寂しくなんてないよ」

「幸のこと、気にしているんだろ？」
「幸さんのことなんて、気にしてないよ。そんなこと、どうでもいいの」
「じゃ、なんで？」
「私は、広志のこと、もう好きじゃないから」
「俺は、まだ美知子が好きだ」
「私は、この島が好きなの」
「こんなところで、何がおもしろいんだよ」
「もう帰って！」
「美知子、一緒に東京へ帰ろうぜ」
「帰らない」
「無理するなって」
「無理してないよ」
「本当は、もう帰りたいんだろ？」
「だから、帰りたくないって、さっきから言ってるでしょ」

「だから、なんでだよ？」
「広志、もう帰ってよ！」
「一緒に東京に帰ろうよ」
そう言って、広志は、美知子に航空券を渡そうと、美知子の手を引っ張った。
そのとき、玄関のドアが開いて、美知子の寝袋を持った壮介が入ってきた。
「美知子、忘れ物」
広志は、美知子の手を引っ張ったまま、壮介を見た。
壮介は、美知子の寝袋を床に置いて、何も言わず出ていった。
「壮介、待って！」
美知子が広志の手を振りほどいて宿の外へ出ると、壮介の車は走り去っていた。
広志は、美知子の後を追って外に出た。そして、美知子の手に無理やり航空券を握らせて言った。
「俺は、こんな汚い所に泊まるのは嫌だぜ。港の近くのリゾートホテルに泊まるよ。美知子も一緒に来れば？」

「汚（きたな）くなんてないよ！　私（わたし）はここが好（す）きなの！」
「そうかよ。じゃ、俺（おれ）はホテルに行くよ。明日の朝、港（みなと）で待（ま）っている、来いよ。なあ、一緒（いっしょ）に帰ろうぜ。じゃあな」
広志（ひろし）を乗（の）せたタクシーは去（さ）っていった。美知子（みちこ）は一人、星の輝（かがや）く空を見上げて大きく息（いき）を吐（は）いた。

次（つぎ）の日の朝早く、壮介（そうすけ）は、美知子（みちこ）に会いに宿（やど）に行った。けれど、美知子（みちこ）は港（みなと）へ行った後だった。
――俺（おれ）、また、だめだったのか。美知子（みちこ）、俺（おれ）、美知子（みちこ）が大好（だいす）きなのに――
気づくと壮介（そうすけ）は、走り出していた。港（みなと）に向（む）かって走り出した。走って、走って、走った。
ようやく港（みなと）が見えてきた。
――あともう少しだ――
港（みなと）に船が停（と）まっている。
――あの船だ――

その時、船が港を出発した。
ーー間に合わなかったかーー
港に到着した壮介は、息を切らしながら、遠ざかる船を見て叫んだ。
「美知子！　みーちーこーーー」
壮介の目から、涙があふれた。
「壮介！」
振り返ると、美知子が立っていた。
「美知子！」
壮介は、両手で涙をふくと、少年のような笑顔になった。
そして、今度はまじめな顔になって言った。
「美知子、俺、俺、俺は、美知子が好きだ！」
美知子の目からも涙があふれた。

「壮介、私も壮介が大好き！」

壮介は、美知子を抱きしめた。

「俺、美知子が帰っちゃったのかと思ったんだ」

「帰らないよ、壮介がいるのに」

美知子はそう言って笑った。

壮介も笑った。

二人は港に背を向けて、歩き始めた。

壮介は、美知子の手をしっかり握った。美知子もその手を握り返した。

五　二人の夢

一週間後の夕方、壮介と美知子は、初めて二人で過ごした浜辺へ行った。

浜辺で、壮介は、三線を弾きながら、またあの恋の歌を歌った。

「私、その歌大好き」

「そう？　好き？　うれしいよ。俺も大好きなんだ」
歌い終わると、壮介はお湯を沸かしてコーヒーをいれた。
二人はコーヒーを飲みながら話した。
「あのさあ、俺、実は、この島でカフェを開きたいんだ」
「どんなカフェ？」
「景色が良くて」
「うん」
「コーヒーがおいしくて」
「壮介のコーヒーなら大丈夫だね」
「一人でゆっくり本が読めるようなカフェ」
「いいね」
「あと、天井に大きな扇風機を付けたい」
「お！　すてき」
「コーヒーの他には？」

「ビール」
「食べ物は？」
「まだ決めてない」
「じゃあ、カレーはどう？」
「いいね、カレー」
「カレーって聞いたら、カレーが食べたくなってきた」
壮介のお腹がグーと鳴った。
「これから、作ろうか？」
「うん」
「じゃあ、買い物に行こう！」
二人は、カレーの材料を買って、壮介の家に行った。そして、美知子がカレーを作った。カレーには、ゴーヤ、ナス、キノコ、ジャガイモ、タマネギ、ニンジンを入れた。
「おいしいね！」
「カフェのメニュー決まりだね」

「うん」
二人でカレーを、あっという間に食べてしまった。
「私も壮介のカフェを手伝いたいな」
「うん、美知子に手伝ってもらえるとうれしい」
「今から、景色のいいところを探しに行こうか？」
「うん、行こう、行こう」
二人は、歩き始めた。空には、きれいな星が輝いている。すると、一つ、大きな星が流れた。
「あ、流れ星！」
「あ、流れ星！」

二人は、顔を見合わせた。
「ねえ、壮介、この前、流れ星見た時、何かお願いした？」
「え？ うん、あのね、美知子がずっとこの島にいますようにってお願いした。美知子は？」
「壮介のいるこの島にずっといられますようにって」
星空の下、二人は初めてのキスをした。

＊

一年後、二人は結婚して、西表島に小さなカフェを開いた。
壁には、美知子が描いた絵が掛かっている。
カフェの窓から見える海は、様々な色に変化する。朝の海。昼の海。夕方の海。夜の海。
どの海も美しくて、美知子は気に入っている。
カフェの隣の畑には、美知子の作った野菜が豊かに実っている。
美知子は、毎日、海を見ながら、野菜のたくさん入ったカレーを作っている。

コーヒーをいれるのは、壮介(そうすけ)だ。
景色(けしき)が良(よ)くて、おいしいコーヒーとカレーを出すカフェは、旅人(たびびと)にも島(しま)の人にも人気だ。

　十一時、カフェを開(あ)ける時間だ。
早速(さっそく)、ドアが開(あ)いて、お客(きゃく)が入ってきた。
「いらっしゃいませ」
「コーヒー、一つ」
「かしこまりました」

美知子(みちこ)と壮介(そうすけ)の一日が、今日も西表島(いりおもてじま)で始(はじ)まった。

【写真】

・表紙、P.32、P.33
アドビストック　https://stock.adobe.com/jp/photos

・上記以外の写真
写真 AC　https://www.photo-ac.com

美知子(みちこ)の星空

2020年10月15日発行(はっこう)

原作：大塚(おおつか)えみ

翻案(ほんあん)：川本かず子

監修(かんしゅう)：NPO多言語多読(たげんごたどく)